

平成28年度 第66回冬休み良書推薦運動

読書感想文コンクール表彰式

平成29年 3月 4日(土)  
サンセール盛岡

主催 岩手県良書推進協議会  
協賛 岩手県学校生活協同組合  
後援 岩手県小学校長会  
岩手県学校図書館協議会  
岩手県PTA連合会

式次第

- 一 開式のことば
- 二 主催者あいさつ
- 三 賞状並びに記念品授与
- 四 審査報告
- 五 来賓祝辞
- 六 作品朗読  
滝沢市立鶴飼小学校 四年 赤坂祐生
- 七 感想発表  
盛岡白百合学園小学校 六年 高橋希
- 八 閉式のことば

審査員

藤村由美先生	齋藤英明先生	近藤澄江先生	田代五月先生	小山文明先生	大淵奈実先生	畠山明美先生	大石善弘先生	作山静男先生
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

平成28年度 第66回

冬休み良書推薦運動読書感想文コンクール

入賞者名簿

「」は図書名

〈最優秀賞〉

かずつておもしろい

【数つてどこまでかぞえられる?】

洋野町立中野小学校

一年 粒来夏帆

カボちゃんへ

【カボちゃんのわすれもの】

紫波町立赤石小学校

二年 岩清水麻央

いつも通りの生活に感しゃ

【それでも、海へ】

宮古市立千徳小学校

三年 吉田歩

なりたい自分のすがた

【逆転!ドッジボール】

滝沢市立鶴飼小学校

四年 赤坂祐生

まぶしい笑顔が教えてくれたこと

【ランドセルは海を越えて】

盛岡市立厨川小学校

五年 佐々木美桜

「ランドセルは海を越えて」を読んで

【ランドセルは海を越えて】

盛岡白百合学園小学校

六年 高橋希

〈岩手県小学校長会長賞〉

すてきなおもたち

【ぜったいくだものっこ】

宮古市立山口小学校

一年 小野寺朝妃

大切な友だちを守るためには

【逆転!ドッジボール】

大船渡市立日頃市小学校

三年 佐藤由栞

幸せをつかむために

【ふしぎ駄菓子屋 銭天堂】

宮古市立田老第三小学校

五年 島山芽依

〈岩手県学校図書館協議会長賞〉

よかったさがし

【とんでもない】

宮古市立崎山小学校

二年 福德千智

「すごい人」を目指して

【白井健三 体操ニッポンの新星】

宮古市立山口小学校

四年 山口梨乃花

未来への希望がまったランドセル

【ランドセルは海を越えて】

八幡平市立安代小学校

六年 立花結来

〈岩手県PTA連合会長賞〉

人げんの子どももたいへんだよ 「とんでもない」

盛岡市立桜城小学校

一年 佐々木 優真

お母さんへ恩返し

【猫の恩返し】

軽米町立晴山小学校

三年 山野下 華涼

私の努力・私の勇気

【願いがかなう ふしぎな日記】

宮古市立山口小学校

五年 濱田 梨緒

〈優秀賞〉

みんなのアイデアで

【ふしぎパティシエールみるか】

奥州市立大田代小学校

一年 佐藤 陽斗

「からすの天ぶらやさん」を読んで 「からすのてんぶらやさん」

盛岡市立仙北小学校

二年 千葉 杏吏

ニンジンと宿題のちがい

【宿題ひきうけ株式会社】

宮古市立崎山小学校

三年 鈴木 天嘉

最高のでこぼこコンビ

【逆転！ドッジボール】

山田町立山田北小学校

四年 大川 星叶

「ランドセルは海を越えて」を読んで 「ランドセルは海を越えて」

軽米町立晴山小学校

五年 福田 紗采

津波を乗り越えて

【それでも、海へ】

宮古市立田老第三小学校

六年 大手 彩華

〈入選〉

みんなちがって、みんなたいへん 「とんでもない」

盛岡市立仙北小学校 一年 駒林 皇輝

数ってどこまであるの

「数ってどこまでかぞえられる？」

奥州市立大田代小学校 二年 梅原 遼介

ハートの国に行ってみたいな

「チビまじよチャミーとハートのくに」

盛岡市立山王小学校 二年 鈴木 紀子

都道府県っておもしろい

「かたちで覚えよう！はじめての都道府県」

盛岡市立桜城小学校 三年 松岡 静輝

すみっこなかま

「すみっこぐらしの読書ノート」

宮古市立崎山小学校 三年 山田 梨七

動物たちの楽園

「ズートピア」

宮古市立崎山小学校 四年 小林 雪菜

自分の時間をありがとう

「猫の恩返し」

宮古市立山口小学校 四年 木村 陽菜

何度も努力、何度もチャレンジ 「命を救われた捨て犬 夢之丞」

宮古市立山口小学校 五年 神先 咲良

「ふしぎ駄菓子屋銭天堂」を読んで 「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂」

盛岡市立上田小学校 五年 菅原 陽向

本当に必要なもの 「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂」

陸前高田市立気仙小学校 五年 菅野 いぶき

一生に一度は行きたい銭天堂 「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂」

岩手大学教育学部附属小学校 六年 小笠原 由騎

〈学校賞〉

宮古市立山口小学校

〈学級賞〉

宮古市立山口小学校 三年一組

宮古市立山口小学校 四年二組

奥州市立大田代小学校 一・二年

奥州市立大田代小学校 三・四年

奥州市立大田代小学校 五・六年

宮古市立崎山小学校 五年一組

宮古市立田老第三小学校 五・六年

〈佳作〉

「かずってどこまでかぞえられる？ケークルのもとになったことば」をよんで

【数ってどこまでかぞえられる？】

一戸町立奥中山小学校 一年 戸来壮佑

からすのてんぶらやさん

【からすのてんぶらやさん】

滝沢市立滝沢第二小学校 一年 熊谷花菜

大すき友だち

【ぜったい くだものっこ】

滝沢市立滝沢第二小学校 二年 角掛梨央

「カボちゃんのわすれもの」を読んで「カボちゃんのわすれもの」

大船渡市立大船渡北小学校 二年 松村黎

どりよくすればなんでもかなう 【願いがかなう ふしぎな日記】

一戸町立奥中山小学校 二年 今泉共

友達を大切に

【逆転ドッジボール】

宮古市立山口小学校 三年 船越結衣

逆転、心の戦い

【逆転ドッジボール】

宮古市立崎山小学校 三年 大下心

ふるさとと共に生きる

【それでも、海へ】

宮古市立山口小学校 三年 毛内カレン

ぜったいに宿題はなくなるならい 【宿題ひきうけ株式会社】

奥州市立大田代小学校 四年 遠藤桃花

あきらめずに勇気を持てば 【アラスカたんけん記】

宮古市立山口小学校 四年 伊藤来

あきらめずに努力することの大切さ 【願いがかなう ふしぎな日記】

宮古市立山口小学校 四年 里見ゆうか

明るい道を開こう

【ランドセルは海をこえて】

宮古市立高浜小学校 五年 田中結音

夢を大切に

【月は、ほくの友だち】

大船渡市立日頃市小学校 五年 新沼瑠衣

運命を変える駄菓子

【ふしぎ駄菓子屋 銭天堂】

宮古市高浜小学校 五年 佐々木紗樺

「気づく」ことの大切さ

【ふしぎ駄菓子屋 銭天堂】

宮古市立山口小学校 五年 女鹿優月

海をこえたランドセルは

【ランドセルは海を越えて】

宮古市立田老第三小学校 六年 島山和

かずつておもしろい

洋野町立中野小学校 一年

つぶらい かほ

わたしは、さんすうが大すきです。気がつくところはんつぶをかぞえていたり、じぶんでたしざんやひきざんのもんだいをつくつてえ本にしてしまうくらい大すきです。この本のだいなを見たとき、ちようのつぎはどうなっているのだろうとしりたくなり、よんでみることにしました。

かずは、ちようでおわるわけではありません。ちようのつぎはけい。けいのつぎはがい。ゼロを一つつけると十ばい、二つつけると百ばい、かずはどんどん大きくなるということがわかりました。そして、なによりも大きくて、びっくりするくらいでかくて、気がとおくなるほどのすう字はグーゴルで、ゼロが百こもつくそうです。わたしは、じっさいに一にゼロを百こつけて一グーゴルをかいてみました。じかんがかかって、手もつかれました。グーゴルは、どんなに大きいすう字で、なにをあらわすのにつかうのでしょうか。それについてがながえはじめると、じかんがあつというまにすぎてしまうほどのしいです。

大きいすう字は、ながいじかんやきよりにつかいます。わたしもプールの水について、パパとかがえてみました。

ながさは、二十五メートル、ふかさは、わたしのせくらいなので百二十センチメートル、コースのはばは、ママのせくらいなので百五十センチメートルとします。一コースにつかう水のりようは、四万五千リットルで、六コース分だと二十七万リットルだと、パパがおしえてくれました。牛にゆうパックでかんがえると二十七万こになります。わたしは、牛にゆうはすきですが、なん年かかつてのむことができるのだろうとおもいました。

このように、みぢかなことをすう字であらわすことは、おもしろいとおもいました。これからさんすうでどんなことを学しゆうするのかたのしみでたまりません。

〔図書名「数つてどこまでかぞえられる？」〕

〈講評〉

算数の問題で絵本を作つてしまうほど、算数が大すきな夏帆さん。夏帆さんにびつたりの本と出合いましたね。

実際にゼロを百個書いてみたり、家族と一緒に身近な物にあてはめてみたり。本を読んで知つたことを深め、広げながら読んでいくところが、とても素晴らしいですね。感想文を読んで夏帆さんの「知りたい」気持ちが伝わってきました。これからも大すきな算数の本をたくさん読んで下さい。

二年 最優秀賞

カボちゃんへ

紫波町立赤石小学校 二年

岩し水 まお

がんばって、カボちゃん。わたしは、わすれんぼうのカボちゃんをおうえんしたいと思ったよ。時間わりはそろえたかな。ふでばこにえんぴつをけずって入れたかな。わたしは、毎日カボちゃんに声をかけてあげたくなつた。

でも、わたしも、お母さんによく言われるんだ。

「時間わりをそろえたの。」

「ハンカチ、ティッシュは入れたの。」

って。お母さんに言われても、それでもやっぱりわすれてしまうこともある。あとでたしかめようとすると、わすれてしまうんだよね。その時にすぐじゅんぴをすれば、あわてることもないし、わすれてこまることもないと思うんだけど。

カボちゃんは、体いくがあるのにうんどうぎをわすれてしまった。こまったカボちゃんは、休み時間に、家まで走つてもどつたね。大あわてだったから、くつ下のまま。ころんで、ひざごぞうをすりむいても、がんばって家にあつたうんどうぎをとり、学校にもどつた。クラスみんなにかばってもらい、こつそりきがえて、体いくをはじめること

ができたカボちゃん。みんなにまもってもらつてよかつたね。カボちゃんのクラスみんなは、とつてもやさしいなあ。

でもね、カボちゃん。いつまでもクラスのみんなにたすけてもらつてはられないと思うよ。わすれものはないほうがいいよね。

カボちゃん。わたしも、わすれものが多いんだ。きのうも今日もわすれものをしてしまったよ。だから、明日こそ、わすれものをしないようにしたいと思つているんだ。毎日、ねる前に道具をそろえておいて、あわてることのないようにしようよ。

がんばろうね、カボちゃん。わたしもがんばるよ。

〔図書名「カボちゃんのわすれもの」〕

〈講評〉

カボちゃんが忘れ物をしないように声をかけて、応援したくなった麻央さん。自分も本の中の登場人物になった気分を読んだのでしょうね。「がんばろうね、カボちゃん。わたしもがんばるよ。」という言葉に、カボちゃんと自分を比べながら一緒に成長していきたい気持ちがかめられていました。これからも、やさしい気持ちでたくさんの本の登場人物とお友達になつて下さいね。



三年 最優秀賞

いつも通りの生活に感しや

宮古市立千徳小学校 三年

吉田 歩

かん野しゅう一さんは、六十四才のおじいちゃんです。おじいちゃんなのに海に出てりょうをしている、かっこいいじいちゃんです。ぼくはつりをしたことはあるけれど、おきに出たことはありません。じいちゃんが、おきに出てとってきたこやつ貝や毛ガニの写真があります。ぼくもおきに出て、りょうをしてみたいと思いました。そして、写真のようなかごいっばいの海の幸を食べたくてたまらなくなりました。

二〇一一年三月十一日、立ってられないほどの大きな地しんがきて、つなみがきて、町がこわされました。じいちゃんは、船を守るためにすぐに海に出ていきました。その日の夜、じいちゃんは船で家族を心配しながらすごしました。じいちゃんの家族も、ひなん先でじいちゃんのお事をいのりながらすごしました。ぼくも、とても悲しい気持ちになりました。がれきの中を一日がかりで港にたどり着いたじいちゃんは、そこがもともとどんなだったかわからないくらいにはかいされた港を見て、（もう、海に出るのはやめよう。）と思いました。

つなみがあつたころ、ぼくは千まやに住んでいました。てい電して、ドキドキしたことくらいしかおぼえていません。いつも通りの生活ができないくらい大へんなことが起こったことを、三才のぼくは知りませんでした。

いつも食べていた物が食べられない生活がつづいていたとき、じいちゃんはまごのしゅつぺに、

「じいちゃんがつってきた白いお魚が、もう一回食べたい。」

と言われました。りょうに出ることも、せつかく守った船を見ることさえしなかつたじいちゃんの心が、しゅつぺの言葉でまた海へ向かいました。自分だけりょうに出るのは悪いと思っていたじいちゃんですが、しゅつぺのことがすきだから、しゅつぺに魚を食べさせたいから、しんさいから二ヶ月後、また海へ向かうことができたのだと思います。

じいちゃんは、海でとってきた魚や貝を地いきの人と分け合いました。そのおかげで、少しづつ港に活気もどりました。がれきだらけだった海や町も、二年半ほどでとうろう流しができるようになりました。さらに一年後、でんとう行事の「はしごとらまい」も行われました。

さいがいがおきて、たくさん命がうしなわれたこと、今でも元の生活にもどれない人がいることは、とても悲しいです。それでも海とともに生活しているりょうしさんのおかげで、今はおいしい海の幸を食べることができます。ぼくも、しぜんめぐみとそこに生きる人びとに感しやしながら、これからもいつも通りの生活ができたらいいなあと思います。

（図書名「それでも、海へ」）

〈講評〉

題名の「いつも通りの生活に感しや」に歩さんの思いが込められています。震災の時に三才だった歩さんがこのように考えることができたのは、海ではたらくかん野さんの悲しみや元気を取り戻していく姿をていねいに読んで、気持ちを想像することができたからだと思います。「しぜんめぐみとそこに生きる人びとに感しやしながらいつも通りの生活ができたら。」という歩さんの考えに感心させられる感想文です。

なりたい自分のすがた

滝沢市立鶴岡小学校 四年

赤坂祐生

この本の主人公は、ほくと同じ四年生の陽太だ。陽太の最大のライバルの鉄平は、ほくとにしていた。ほくはこの本を読んで、自分がやりたいからやるんじゃないかと、相手の気持ちも考えてから行動することが大事なんだと気づかされた。

陽太は、鉄平と健人が苦手だった。鉄平はよくテレビの時代げきに出てくる悪いとの様みたいに、何でも自分中心じゃないと気がすまない人だからだ。だから陽太はできるだけ鉄平と関わらないようにしていた。しかし武士ちゃんという大事な友達を家来みたいにあつかっていたことが頭にきて、鉄平と健人をたおすためにドッジボールの試合をした。陽太は、ほくが予想もなかった作戦を使った。その作戦とは、運動が苦手なドッジボールではいつも鉄平にボール拾いばかりさせられている武士ちゃんを陽太がひそかに特訓して戦った。もしほくだったら、自分だけで戦っただろう。理由は、武士ちゃんのように体が大きく運動が苦手な人がいても、じやまになるだけで考えてしまうからだ。見すてなかつたのが陽太のすこいところだ。ほくも学校の休み時間によくサッカーをするけれど、もしかししたら、勝つことばかりにこだわっていて、運動が苦手な人にはパスをしないで得意な人にはパスをして、苦手な人のすこいところも自信をなくさせていたかもしれない。人それぞれできるまでの時間がちがうだけなんだと思う。だから陽太は武士ちゃんに特訓したんだ。ほくは、陽太のようなやさしい気持ちを持った人になりたいと思った。

ほくは、陽太のある言葉が心に残った。「勝ち負けは関係ない、正々堂々戦ったか」という言葉だ。ほくは今まで、勝ち負けが一番大事だと思っていた。正々堂々戦ったかなんて気にもしなかつた。ほくは、それを知っていればよかつたと思つたことがあつた。それはバドミントンの大会で、決勝で負けてすこくやしい思いをした時だ。相手は何年もやっていたけれど、ほくは四月に始めたばかり。負けはしたけれど、正々堂々戦つた。負けたおかげで、自分のよかつた所やまだまだ練習がたりない所が分かつた。負けても得られるものがあることが分かつた。

最後の場面で武士ちゃんが、本当は「たけし」と名乗つた時とてもビックリした。なぜ自分のことを弱虫だと決めつけているのかと思つたら、よくニュースでやっている「差別」されていたんだと考えた。体が大きいからといっても、みんな強いわけではない。ぎやくに、体が小さい人がみんな弱いわけではない。ほくは、はだの色や外見で決めつける人にはなりたくないと思つた。ほくは、自分の名前の読み方のように、勇氣を持つて正しいことをつらぬく人にもなりたいし、武士ちゃんのように、やさしく人を助けられる「えんの下の力持ち」にもなりたいと思つた。

(図書名「逆転！ドッジボール」)

## 〈講評〉

登場人物と自分を重ねて読み、自分自身を見つめることができましたね。最後まで心を働かせて読んだことが伝わってきます。また、あらすじや感じたことを、自分の言葉で表現する力にも感心させられます。組み立てがしっかり考えられていてテンポもよく、読み手が引きつけられる文章です。「勇氣をもって正しいことをつらぬく人になりたい。」という祐生さんの願いに向かって、力強い一歩を踏み出した感想文です。

まぶしい笑顔が教えてくれたこと

盛岡市立厨川小学校 五年

佐々木 美桜

「行ってきまーす。」

私は毎日ランドセルを背負って家を出る。ごく当たり前のことだ。だから私がこの本の題名と表紙の女の子を見たときは、「ランドセルがそんなに大切なの？」と疑問に思ってしまった。でもその疑問は、この本のページをめくっていくうちに解けていった。

アフガニスタンは、ヨーロッパとアジアと中東の国々に囲まれている。政治、宗教、民族など、複雑な事情が重なり、長く戦争状態が続いているのだそうだ。この本の著者内堀さんがたい在していたときも、無人こうげき機や兵士を乗せた装甲車が近くを走っていたらしい。死と背中合わせの生活だからこそ、人々は「生きていることとの尊さ」を知っているのにちがいない。

日本からのランドセルを受け取った子どもが喜んでいる写真を見た。それも一人、二人ではない。みんながはじけるような笑顔だ。うれしそうにランドセルをだきかかえる子、文具を手にして笑っている子、ノートを夢中で見つめている子。

「うれしくてジャンプしたんだ。」

と、幸せそうに言う女の子もいる。私はランドセル、教科書、ノート、文具など何不自由なく持っている。でもアフガニスタンの子どもの方が、素直に喜ぶ心や感謝する心を持っている。私よりもよっぽど心が豊かだ。

またアフガニスタンの子ども達は、校舎も教科書もノートもないのに、みんな集中して学習している。先生の質問に一斉に手を挙げ、

真剣に答える。しかも、自分のためだけに学ぶのではなく、将来周りの人を助け、人の役に立ちたいと考えて学んでいるのだ。私は自分を振り返ってみた。私は「自分の将来のため」という思いで勉強をしているけれど、「人のため」という思いをもったことはなかった。アフガニスタンの子ども達はすごい。

私はこの本を読んで二つのことを学んだ。一つ目は、感謝の心の大切さだ。私はこれまでランドセルはもちろん学校や教科書、ノート等があることは当たり前のように思ってきた。ありがたみについて考えたことすらなかった。私達日本人は自分達が恵まれていることに気づき、感謝すべきだと思う。アフガニスタンの子ども達のまぶしい笑顔が教えてくれた。二つ目は、人を喜ばせることの大切さだ。使わなくなったランドセルを寄付するだけでたくさんの子どもの達を笑顔にできる。内堀さんの写真と言葉が教えてくれた。思いやりの心は海をこえ、国境をこえ、政治や宗教、民族をこえて届くのだ。五年間使ってきた私のランドセルにはたくさんさんのきずと思いがあふれる。手放すのはさびしいけれどあと一年使ったら寄付しようと思う。だからその日まで感謝と思いやりの心をこめて大切に使いたい。アフガニスタンの子ども達のまぶしい笑顔を思い浮かべながら。

(図書名「ランドセルは海を越えて」)

〈講評〉

一冊の本から佐々木さんが考え、学び取ったことを忘れないでほしいと思いました。自分達がどんなに恵まれた環境にいるのかという感謝の気持ち。そして、「学ぶ」ということが点数を取るためではなくて、生きていく上で必要なことだというアフガニスタンでの現実を。

あと一年と少し、ランドセルを大切に使うから寄付しようという決心が、うれしかったです。我が家でも十年前にランドセルを寄付したことを思い出しました。

## 「ランドセルは海を越えて」を読んで

盛岡白百合学園小学校 六年

高橋 希

ごつごつした石が広がる荒地、風で舞い上がる砂ほこり、無人攻撃機が飛ぶ空の下にはぼつんと小さな黒板がある。その黒板が「学校のしるし」。その前に集まる子供達は誰も彼も着る服は粗末で質素。あかぎれてガサガサの手。爪の間に土が入り汚れた足。そんな子供達が字を習いに、算数を学びに黒板の前に集まる。私のように「ほら、早く起きなさい。早く学校に行く準備をしなさい。」と母親に言われて来ているのではない。子供達は心から「学びたくて」集まって来る。「自分達の将来」のために集まって来るのだ。

アフガニスタンの子供達の多くは貧しいために働かねばならず、「学ぶ機会」が奪われている。そんな中、日本から贈られたランドセルが「教育」のきっかけを作った。子供達にとって「学ぶ」ことは「希望」そして「明るい未来の予感」なのだ。ランドセルは「平和のシンボル」そのもの。

ランドセルを手にはしゃぐ子供達の様子は私と変わらない。でも私はこの子供達とは全く違う。私は井戸で水をくんだことも、重いバケツの水を運んだこともない。荷馬車もロバの扱いも知らない。麦を刈り取ったこともない。今の私はアフガニスタンでは全く役に立たない。一日も生きていけそうもない。

私の過ごす日常が「当たり前」で、私はその「当たり前」にある環境に対して「ありがたみ」を意識することなく毎日過ごしてきた。何に対して、誰に対して「感謝すべき」なのかも考えたことがなかった。私の日常をアフガニスタンの子供達が見たらどう思うだろう？

私は恥ずかしいような、申し訳ないような、責められているような、悪いことをしているような複雑な気持ちになった。

私は、一生懸命、日々「生きる」ための努力をしていますか？私は、生きることの尊さを感じていますか？私は、家族や友達と一緒に過ごせる幸せをかみしめていますか？私は、自分の将来のことを毎日真剣に考えていますか？

私は学校行事を通して「ユニセフの活動」に関して学ぶ機会がある。世界にはその日を生きるのやつとの人達が大多数。私のように恵まれた環境の中で過ごす人達はほんの二にぎり。私は「物語」ではない「現実」を読み進める中で、衛生的で文化的、便利で不自由のない世界は、この子供達の犠牲の上に成り立っているのではないかと感じ始めた。私の現実アフガニスタンの子供達の現実と決して無縁ではないのだ。私は真剣にそのことを考え、そして、何をすべきか・何ができるか考える必要がある。

アフガニスタンの少年が持つ花は私がよく目にする花と同じ。その少年の笑顔も私がよく目にする友達笑顔と同じ。私はその花と笑顔のおかげで、もやもやした、落ち着かない、重たい気持ちも少し楽になった。

(図書名「ランドセルは海を越えて」)

## 〈講評〉

ランドセルとのお別れが間近に迫る冬休み。一冊の本との出会いが、高橋さんに、日本では当たり前で考えることすらなかった「学ぶ」とは？」という疑問を投げかけたのです。学校行事で「ユニセフ」について学んでいる高橋さんでも、知らない現実がたくさんあり、自分に何ができるのか、改めて深く考える機会になったことと思います。

何枚かの写真から高橋さんがくみ取ったものをあたためながら、中学生生活に歩み出してほしいと思います。

すてきなおともだち

宮古市立山口小学校 一年

おのであ ささひ

学どうほいく「くだものっこ」のみんなは、げんきいっぱいでしたのしそう。いろんなくだもののおともだちがいて、わくわくしちゃうた。わたしも学どうにいつてるよ。この本に出てくるくだものたちについてのおともだちもいるよ。わたしはリンちゃんにってるかな。

「くだものっこ」のいもほりで、ナシナちゃんがないうちやった。それは、ナシナちゃんがぬいたおいもがじぶんのかおにっているのがいやだったから。そのときに、みんながあわててなくさめてくれたね。おともだちが、「ナシナちゃんのがーばんいいおいもだよ。」っていつてくれてなきやんだね。そしてナシナちゃんもそのおいもを「ナシモちゃん」っていつて、みんなでげらげらわらったから、あんしんしたよ。ナシナちゃんのことをしんぱいしてくれおともだち、やさしかったね。すてきなおともだちだね。おいもをたべたらおならが出て、またまたのしくなっちゃった。みんなでたべたおいもはきつとおいしかっただろうな。わたしも学校のみんなでとったえだまめをたべたとき、とてもおいしかったのを思い出したよ。

みせのおじさんのぎっくりごしを、うたでなおしてあげたのもすごいね。くだものっこたちがつくったうたをわたしもうたってみたけど、たのしくてげんきが出るうただとおもったよ。本ばんですこしっばいしちゃうたけど、おじさんのぎっくりごしがおせてよかつたね。やさしいみんなのいのりが、おじさんにつたわつたんだとおもうよ。くだものっこはみんながしゅじんこうだね。みんながいつしよけんめいきょう力してがんばつていたもんね。一人一人せいかくはちがつても、やさしくてすてきなおともだち。わたしもくだものっこのみんなみたいに、こまかつたことがあつたらたすけあつて、えがおいつぱいのすてきな学どうにしたいな。

〔図書名〕『ぜったい くだものっこ』

〈講評〉

お話はなに出てくるくだものたちをお友達ともだちのように思いながら読み進めたのでしょう。一人ひとりの良さをしっかりと読み取って感想文にまとめています。「くだものっこはみんなが主人公だね」という文がとても心に残りました。みんなを大切にしながら読み進めることが出来る朝妃さんは、すてきですね。

お話はなの中の出来事できごとを一緒に楽しんで、自分の体験たいけんと重ねて読んでいるところもいいです。これから、本ほんを読んで、お話はなの中からもお友達ともだちを見つけてくださいな。

大切な友だちを守るためには

大船渡市立日頃市小学校 三年

さとう ゆいか

わたしは、この本の題名を見て、さいしょはドッジボールのし合の話だと思いました。でも、ただのし合の話ではなくて、いじわるなてつぺいとけんとに、陽太がぶしくんと二人で立ち向かっていく話だということに気がつきました。

わたしが一番心にのこったところは、陽太が、どろのついたボールをてつぺいに当てられたところです。陽太は、ドッジボールのし合で、てつぺいにボールを当てただけなのです。てつぺいのやったしかえしは、相手をとでもきずつけます。だれでもわざとどろを服につけられたら、いやだと思えます。

もし、わたしが同じ事をされたら、くやしくて一日中泣いていたと思います。でも、陽太は泣かずに、もう二度とてつぺいといっしょにドッジボールはしないと決めます。陽太は大すきなドッジボールをしなくなるほど、くやしかったんだと思えました。

ドッジボールをしなくなった陽太に、ぶしくんという友だちができました。そして、ぶしくんも陽太と同じように、だんだんいじわるをされるようになりました。陽太は、ぶしくんを助けるために、二人でドッジボールのつくんをしました。わたしは苦手なことをがんばるぶしくんは、すごいなと思いました。そして、友だちのために行動する陽太もやさしいなと思いました。けっかは同点でしたが、ぶしくんが上手になったことで、てつぺいたちをびつくりさせることができました。

し合の後、てつぺいたちにしかえしされそうだったけど、今度は

ぶしくんがてつぺいを助けてくれました。陽太とぶしくんは、おたがいに友だちを大切にしていることが分かりました。わたしは、その二人の関係がともいいなと思いました。もしかしたら、この後いじわるなてつぺいも、やさしくなるのではないかと思えます。なぜなら、わたしもいいなと思ったように、てつぺいも二人の関係をいいなと思ったからです。

この話についてお母さんと話をした時に、「いじわるをしている子を見て、由柎だったらどうする？見て見ぬふりをするのは、いじわるをすることと同じだと思うよ。」と教えてくれました。それを聞いてわたしはドキドキしました。前に、見て見ぬふりをしてしまったことがあるからです。わたしは、

陽太みたいにいっしょにたたかてあげることができないけど、やさしく声をかけていっしょにいてあげることができると思えます。これから、だれかがいじわるをされていることがあったら、いっばい声をかけてあげたいです。

この本を読んで、わたしは友だちの大切さを知ることができました。こまっている友だちがいたら、見て見ぬふりをするのではなくて、友だちのために行動できる人になりたいです。

（図書名『逆転！ドッジボール』）

〈講評〉

主人公の行動を自分と比べながら読むことで、気持ち想像することができましたね。いじわるな鉄平も優しくなるのではないかとこの感想には、由柎さんの思いやりが表れていて心が温かくなりました。

お母さんと本について話し、自分自身を振り返った由柎さん。主人公から学んだことを生かし、友達のために行動できる人になりたいという考えが素晴らしいです。読書によって自分を大きく成長させることができました。

幸せをつかむために

宮古市立田老第三小学校

五年

島山芽依

古銭柄の入った、濃い赤紫色の着物を着た女の人、これだけでも十分に印象的なのに、どっしりと大きく太っていて、まるですもうとりのような迫力を持つ人。これが銭天堂のおかみの紅子さんだ。この人が表紙の真ん中に座っている。彼女の持つ何とも言えない不思議であり、少し不気味な笑みに誘われ、思わず私も紅子さんの店に入ってしまった。

ここで売られている駄菓子屋は妙なもののばかりで、「あかん棒」とか「虹色あめ」「ぶるぶる幽霊ゼリー」「うらめしパン」等々、ちよつと笑ってしまうものばかり。実は私は駄菓子屋という所には一度も行つたことがない。でも、その商品名を聞いただけでなんだかドキドキしたし、駄菓子屋に行つてみたいと思つた。もしかして、これも紅子さんの魔法なのかもしれない。しかも、紅子さんの駄菓子はこの世ではありえない力を持つ。水さえ怖かつた人がグミを食べるだけで泳げるようになったり、ボンボンを食べるやいなやカリスマ美容師になつてしまつたり、という具合だ。

私は、この銭天堂と紅子さんは、誰かに天罰を与えるものかと思つてた。しかし、それは違つていた。なぜなら、紅子さんは店に来たお客にお菓子を勧めることはしない。最初にお客の話を聞くのだ。それから、その客に一番最適な駄菓子を勧める。それだけじゃない。そのお菓子は信じられないくらい安い。お客がその時、たまたまポケットに入っている小銭、例えば十円とか五十円で買えるのだ。これは罰とは言えない。だから、私は激安の値段で買わせておくとい

う手なのかとも思つた。が、それも違つていて、話の多くは誰かが幸せになつていく。「クッキングツリー」では二人の兄弟が、虐待の母から逃れられる。「猛獣クッキー」では信也の妹が、兄のいじめから脱出する。「カリスマボンボン」では、典行が念願のカリスマ美容師になるが、欲ばつて人の駄菓子まで取り上げ、転落の人生に。

ここから考えられるのは、人が幸せになるためには、やはり最低限やらねばならないことはきちんとやるのが大切だということではないか。例えばあいさつはしっかりとやるか、自分の仕事は責任をもって最後までやる、人をねたんだり恨んだりしない、余計な欲は出さない等が大切だし、それが幸せの近道だと紅子さんは教えてくれていると思う。そして何より大切なのは、自分のありのままを自分自身が愛せるようになることだと紅子さんは伝えている気がする。それがどうしてもできない人達に、紅子さんは駄菓子の魔法でお手伝いをしてあげていんだと思う。

私は今、人前で失敗することが怖くて、一步を踏み出せないことがある。そのため人に頼つてしまうことがしばしばある。人に笑われても、人格が否定されたわけじゃない。自分を思い切つて表現してみなくちゃ、紅子さんに出会つてそんな思いを抱いた私だった。

（図書名「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂」）

#### 〈講評〉

少し不思議な駄菓子屋さんのお話。駄菓子屋さん初体験はとても楽しかつたようですね。店主の紅子さんがお客さんの話をきいた上で、駄菓子を勧めることや、紅子さんの勧めたお菓子がとても安いことで、うさぐささを感じていたのに、読み進めると意外なことが起こつて……

人の幸せや、生きていく上で大切なことを紅子さんから教わつた島山さんが、自分を思いきつて表現していく姿を楽しみにしています。

よかつたさがし

宮古市立崎山小学校 二年

福徳千智

わたしにしかできないこと、すごいところなんて考えたことなんかなかったなあ。

でも、うらやましいって思ったことは、いっぱいあるよ。げきでは、大きなこえが出来る人のことをいいなあと思つたつけ。マラソン大会の日、足がはやい人ってかっこいいなあってあこがれた。

さいやうさぎ、くじらにきりんも、みんなみんな自分じゃないこと、自分にできないこととあい手をくらべてうらやましがっている。

けれども、いくらほめられても、かならず

「とんでもない。」

って、こまつてることや、なやんでることをつぎつぎ言つてる。

まるで、うらやましいと、とんでもないのバトンタッチみたいだ。

スタートの男の子がわたししたうらやましいのバトンは、ないものねだりかな。それをうけとつた「さい」からはじまつて、けつきよくさいごは、また男の子にもどつてしまつ

てる。

自分にはないものは、よく見えるって気づいた男の子は、「ぼくは、ぼくでいいんだな。」

って、あんしんしたと思う。

わたしも、お友だちのことをうらやましがってばかりいないで、何かががんばってみようかな。

かけさん九九をすらすら言えるようになったこと、はずかしがらずに手をあげてはつびようできるようになったことなんか、ほめてあげてもいいかも。

よかつたさがしをはじめたら、もっと、もっといろんなことができそうな気がしてきた。

男の子も、あつたかいおふとんの中で、本を読みながら、わたしと同じことを考えているかもね。

（図書名『とんでもない』）

### 〈講評〉

最初は「うらやましいと思つたことはいっぱいある」と書いていた千智さん。登場した動物たちが相手をうらやましがってばかりいることに気が付きます。そして、最後には、自分の良いところを一杯見つけることが出来ました。主人公の男の子と一緒に自分を見つめ直したことが伝わってくる文章でした。

これからも、良かった探しを続けてくださいな。



「すごい人」を目指して

宮古市立山口小学校 四年

山口 梨乃花

小さいころお父さんの体そう教室でトランポリンで遊んでいただけの白井選手は、五才で出場したオープン参加の大会で高得点を出していました。ダボダボのユニフォームを着ているのを笑われて、「みんなをびつくりさせてやろう」と思ったのかもしれない。とにかく、五才の白井選手の才のうはみんなをびつくりさせました。わたしは、きつともって生まれた才のうなのだろうなあ、すごいなあと思いました。

でも、本を読んでいくうちに、生まれつきの身体能力だけではなく、負けずぎらいの性かくや見て学ぶ力や、失敗を次に生かそうとする気持ちや、細かいところまで気を配って、うまくできる方法を考えることなどたくさんのがあったからこそこんなすごい選手になったのだと分かりました。

特にわたしがすごいと思ったことは、勉強と体そうというどちらも大変なことを二つとも手をぬかずによりやり続けてきたことです。わたしにとって、二つのことをどちらも一生けん命やるということとはとてもむずかしいことに思えます。

わたしはピアノを習っています。ピアノをひくことは大好きで、練習するのも、レッスンに通うのも楽しみです。発表会が近くなつたときは、いつもよりたくさんピアノの練習をします。でも、そんな時は勉強をあまりせずにピアノばかりひいています。また、学校でのテストが近づくと勉強の方に集中して、ピアノを全然ひかないということもあります。このようにどちらか一つに集中すると、か

た方がおろそかになってしまふのです。でも、白井選手は集中して授業を受けたり、短い時間を利用して勉強したりして、成績もトツブだったそうです。いくら負けずぎらいとはいえ、やると決めたことをやりとげる強さがあるのだと思いました。私も白井選手のようにピアノにかぎらず、自分で決めたことや自分で引き受けたこと、やらなければならぬことをしっかりとできる人になりたいと思います。そう考えてがんばることがしよう来につながるように思います。

白井選手は中学生のとき、内村選手に「いつか一緒にオリンピックに出られるといいな。」と、言われたことがあります。まさかこの言葉が現実になると思っていなかったかもしれない。この言葉がずっと心の中にあつたのだと思います。夢をもって、夢に向かってがんばったことがオリンピックの金メダルにつながったのでしよう。

わたしは、大好きなピアノを生かした仕事ができるといいなと思つています。そのためには白井選手のように、好きなことを一生けん命やり、毎日の勉強もしっかりやり、目標をもってがんばりたいと思います。そしてわたしも、白井選手のような「すごい人」を目指したいです。

（図書名「白井健三 体操ニッポンの新星」）

#### 〈講評〉

白井選手の才能だけではない素晴らしさを感じ取ることができましたね。本の内容を自分に重ね、自分自身を振り返ることで生まれた感想です。梨乃花さん自身がピアノの練習を一生懸命頑張っているからこそ心に残つたのだと思います。特にピアノと勉強の両立の部分には実感がこもっています。

この本を読み返しながら、夢を実現させられるように頑張ってください。白井選手に負けない「すごい人」を目指してくださいね。

未来への希望が詰まったランドセル

八幡平市立安代小学校 六年

立花結来

私がこの六年間、毎日背負い続けたランドセル。小学校を卒業するのと同時に、このランドセルは役目を終え、部屋のすみに置いて時々思い出して見る位になるだろう。しかし、使い終わったランドセルが、海を越えたアフガニスタンの子ども達に夢と希望を与えているなんて。私は「ランドセルは海を越えて」という本に出会って、ランドセルや、そのほかいろいろな事を考えるようになった。

アフガニスタンでは、現在も激しい戦闘がおきているそうだ。生まれてから五才になる前に亡くなってしまいう子どもも多いという。それでも、アフガニスタンの小学生は、とても元気だ。そして、少し古くなったランドセルを、とてもうれしそうに笑顔で背負っている。きつと、争いととなり合わせで生きているアフガニスタンの小学生にとって、「ランドセルを背負って学校に行く」ということは、あたり前じゃなく、特別な事なのだ。

私たちは、入学する時、あたり前のようにランドセルを準備してもらい、あたり前のようにそれを六年間大切に使っている。アフガニスタンの小学生は、そうではない。使い古したランドセルであっても、まるで宝物のように大事に抱えている。そしてみんな、幸せそうに笑っている。勉強をしている時の表情も、みんな真剣だ。まるで、「一言も聞きのがさないぞ。」とも思っているような目だ。勉強を毎日できる事があたり前ではないからこそ、必死で学ぼうとしているのだと思う。

私は、同じ世界の、同じ年の子どもたちが、安心して毎日常生活し

たり、勉強したりする事ができていない事が、かわいそうでならなかった。少しでも、助けてあげたいと強く思った。さらに、アフガニスタンには、大人でも字が読めない人もいる。小学校に行けなかったからだ。小学校に行けない子どもたちは、家族のために働いているそうだ。私は、家族のために働くことをえらいなと思うけれど、やっぱりアフガニスタンの子どもたちにも、学校に行ってほしいと思う。それは、学校に行くと、毎日いろいろなことを知ったり、友達とも遊べたりするからだ。私が、この六年間で学んだ事がたくさんある。たくさん字が書けるようになり、自分の思いを人に伝えられるようになった。アフガニスタンの子ども達にも、同じように小学校で、学んでほしい。

「学校は、未来へつなげる希望だ。」と筆者は言っている。その言葉通り、この写真に写っている子ども達も学校に行き、たくさん事を学べたとしたら、きつとその学んだ事をいかして、社会をよりよくしていつてくれると思う。

アフガニスタンの子ども達も、勉強を安心してできる日が早くくるといいなと思っている。未来への希望が詰まったランドセルを背負って。

〔図書名「ランドセルは海を越えて」〕

〈講評〉

毎日あたり前に通う学校。立花さん達は、どんな顔で通っているのでしょうか。この本の写真の中の子どもの顔は、にこやかで喜びに満ちています。日本の子どものお下がりでも、時には机、時には勉強道具入れとして活躍するランドセルを手にした子ども達にとって、学校が「未来へつなげる希望」であることを立花さんは学んだのですね。

立花さんの思いが、整理されて、よく表現されていると思いました。

人げんの子どももたいへんだよ

盛岡市立桜城小学校 一年

さなまき ゆうま

ほくは、どうぶつが、大すき。一ばんすきなどうぶつは、ヤギ。ヤギのりっぱなつのがうらやましい。もし、ほくにヤギのつのがあつたら、大きな木をつのでおつてみたいな。手をつかわないで、つのでなにかものをとつてみるのいいな。大きなつのもつているヤギは、やつぱりかっこいい。

「とんでもない」の本に出てくる、どうぶつたち。あれ、あれ、あれえ。つよいライオンが、人げんの子どもがらくでいいつていいつているよ。

ほんとうかな。

ほくは、おかあさんに、「しゅくだいは、ちゃんとやったの。」ときかれて、できていないときは、「まだやっていない。」つていうよ。そうすると、「はやくやりなさい。」つておこられるんだ。だから、やつぱり、人げんの子どもは、たいへんだ。

でも、おかあさんは、ほくのことをきらいでおこつているんじゃないつていつた。おかあさんは、ほくに、いろんなことをおぼえてほしいから、おこるんだつて。

ヤギに大きなつのがあるのは、たたかうためだとおもつた。たにかいにまけると、けがをしたり、しんだりするかもしれない。とつてもいたいし、しんだらくるしいだろうな。

どうしよう。人げんの子どもも、ヤギも、キリンも、クジラも、みんないいところも、たいへんなところもあるみたい。かっこいいヤギのつのはほしいけど、たたかいでけがをしたり、しんだりするのは、やつぱりいやだ。どうしよう。

いろいろかんがえたら、いまは、人げんの子どもがいい。ヤギのつのはかっこいいけど、しぬのはいやだ。そして、おかあさんにおこられるのは、やつぱりいやだから、ほくは、べんきようや、おてつだいをがんばつてみようかな。

〔図書名「とんでもない」〕

### 〈講評〉

優真さんは、本に登場した動物たちと一緒に、うらやましいなあと思つたり、大変だなあと思つたりしながら読み進めたのでしよう。

特に、大好きな動物については、自分と比べながら詳しく読んでいました。そして、

「どうしよう。みんないいところもかっこいいところもあるみたい。」と気がつきました。いろいろ考えながら読んだことが伝わる感想文でした。素晴らしいです。

お母さんへ恩返し

軽米町立晴山小学校 三年

山野下 華涼

私は、「猫の恩返し」という本を読むまで、「恩返し」について考えたことがなかった。だれかを助けた人が、お礼を言われたり、助けてもらった人がお礼をしたりしているのは見たことがある。でも、そのお礼は、恩返しとは言わないと思う。じゃあ、恩返しってなんだろう。辞書で調べてみると「恩を受けた人に対して、それに報いること」と書いてあった。「報いる」とは、「人から受けたことに対して、それにつり合ったお返しをすること」らしい。「つり合ったお返し」について考えてみた。ハルちゃんは、おなかをすかせた猫に、クッキーをあげた。車に引かれそうだった猫の王子を助けた。ハルちゃんは、猫の命を救ったのだ。そんなハルちゃんにつり合ったお返しを、猫たちはしていない。またたびやねずみなど、ハルちゃんにとつてはいらぬお返しばかりだった。命を助けてあげたのだから、同じように、命を助けるようなお返しがつり合っていると思う。

じゃあ私は、だれかに恩返しをしたことあるのかな。私はハルちゃんみたいに、だれかの命を助けたことはない。それに、恩返しをしたこともないし、されたこともない。でも、よく考えると、私はこの本の猫と同じように命を助けられているのかもしれない。

私のお母さんは、かんごしをしていて、いつも仕事がいそがしい。そして少しこわい。そんなに笑っているところを見たことがない。つかれているのかな。怒ると、足音が五倍になる。私が朝起ききれなくてぐだぐだしていると、放っておかれる。

でも、「命」という言葉で頭の中にうかんだのは、お母さんの笑顔。私がかぜをひくと、かならずおかゆを作ってくれる。宿題を教えてくれるし、くつや服も買ってくれる。毎日、野菜の多いご飯を作ってくれる。私が学校の友達のことと悩んだ時、「気にしない、気にしない。」と明るく言ってくれた。おかげで私は、元気に大きく育っている。そして、小さいことは気にせず、明るく生活できるようになった。お母さんがいると、元気になれる。わたしにとってお母さんは、大切な人。

これは、命を助けてもらっているのと同じことだと思う。お母さんはべつに、「ありがとう」の気持ちをごめて、恩返しをした。でもお母さんに、「ありがとう」の気持ちをこめて、恩返しをしたい。私は、どんな恩返しをしたらいいのだろう。たくさん「おはよう。」って言いたい。つかれた時は、肩をもんであげたい。のこさずご飯を食べたい。毎日の楽しかったことを、たくさん聞かせたい。これくらいしか今は思いつかないけど、ハルちゃんへの猫からの恩返し。最後にはむだではなかったように、お母さんにも何か伝わったらいなと思う。そしていつか、「はすみを育てて良かった。はすみがいて幸せだなあ。」と思ってもらえるような私になりたい。

(図書名「猫の恩返し」)

〈講評〉

「恩返し」について本当によく考えましたね。意味調べで分かったことから、どこにその行動が表れているのか、何度も本を読み返したのだろうと思います。さらに自分の身近な生活ではどうなのか考えることができました。そして、恩返しをしたい相手「お母さん」の存在に気付かされたのですね。

華涼さん自身が考える力をぐんぐん成長させた読書でした。お母さんへの「恩返し」もぜひ実現してくださいね。

私の努力・私の勇氣

宮古市立山口小学校 五年

濱<sup>はま</sup>田<sup>だ</sup>梨<sup>り</sup>緒<sup>お</sup>

井上光平君と石原なつきさんは、家も近い幼なじみです。石原さんはまもなく引越してしまいます。別れたくない気持ちを素直に表現できず、井上君は口げんかをしてしまいました。けんかをする必要もないささいなことで、謝る機会もなのまま石原さんは引越してしまいました。

書けば願いがかなう日記なんて信じていなかったけど、「もう一度石原さんに会いたい」と素直に書いた井上君。しかし、書いただけで何か行動に移すわけではありませんでした。他の願いは「死んだおばあちゃんに会いたい」など、願いのレベルがちがひ、とても小さいことのように、でも井上君にとってはとても大きな問題だったのです。

仲直りしたいけど自分から行動をするのはとても苦手であることは、井上君のもじもじした態度から伝わってきます。あとから謝ればよかった」という後悔、けんかして五分後に分かる友達の大切さを読者にも教えたかったのだと思います。

石原さんから手紙が届きました。大事な人の存在や自分から謝れなかった悔しさを感じ始め、なみだを流したのだと思います。そしてできれば直接会って、そのときの自分の気持ちを伝えたいのだと思います。

わたしにはそんな勇氣はありません。友達とけんかをして、謝る場面になっても恥ずかしくて謝れないと思います。謝る一歩をなかなか踏み出せません。井上さんと少し似ているところかもしれませ

ん。

その謝れないという殻を破ります。殻を破るには「書いた望みをかなえてくれるのは、おばあちゃんじゃない。僕なんだ。」という井上君と同じ強い思いをもつことが必要です。勇氣をもって希望が丘にいる石原さんに会いに行きました。ここは何回読んでも、心にジーンときて感動することができます。

井上君は以前とは見ちがえるほどで、いろいろなことができるようになりました。「オポレンジャー」というあだ名を付けられたのに、泳げるようになりました。また感想文を書くときは、手伝わってもらったりお兄さんのものを写したりしていました。しかし、長い本を読みだれの手も借りずに一人で書き上げることができました。

私は今の自分の殻を、破りたいです。あと三ヶ月で六年生になるのに、課題がたくさんあるからです。この本を読み、六年生になるまでに次のことを宣言します。苦手なことから逃げずに立ち向かうこと、もじもじしいではつきりと話すこと、下級生が困っていたら進んで声をかけることです。殻を破るために勇氣が必要です。私の学級でも課題になっている「有言実行」ができれば、きつとまわりから認められる六年生になれると思います。口だけでなく、努力をし行動に移せるようにしていきたいです。

(図書名「願いがかなう ふしぎな日記」)

〈講評〉

「書く、ねがいがかなう日記」があればいいなあ、と誰でも思うことでしょう。でも願いをかなえるのは、日記ではなくて、自分なのだというところに、濱田さんは気がついたとつづっています。その中で、自分の課題を見つけ、努力をして、行動に移していこうとする濱田さんを応援したいと思います。

これからも考えたことを文章にする訓練を続けていってほしいです。

## 審査を終えて

平成二十八年度の冬も多くの作品が寄せられました。応募数は、低学年が六十四点、中学年が六十二点、高学年が六十二点、合計百八十八点でした。

私たち審査員は、それぞれの作品を読み味わいながら、読書感想文として内容について協議してまいりました。その中で、話題になったことを次のようにまとめましたので、今後の参考にしていただけたら幸いです。

### 〈低学年〉

子どもらしい発見や驚きのある作品が多くありました。特に、『数つてどこまでかぞえられる?』という本を読んだ感想文には、本を読み進めるほどに高まっていく数への興味や関心がよく伝わってきました。

また、親子でそろって読書する様子が感想文から伝わるものもあり、たいへん、ほほえましく読ませていただきました。身近な人と、本をめぐる感想を伝え合い、共感したり、疑問を投げかけたりすることは、自分の考えを深めることにつながりますので、続けてほしいと思います。

### 〈中学年〉

夏から冬にかけて、本の読み方や表現方法に、大きな成長を感じました。殊に、三年生は、これまでの簡単な感想に終わらず、自分だったらどう考えるだろう、という一歩

踏み込んだ感想に発展している作品が多かったです。

『宿題ひきつけ株式会社』という本を読んだ感想文には、こんな会社があると「よい」「困る」の二派があり、それぞれの体験が生かされて充実した感想が展開されていました。

### 〈高学年〉

読むことを通して自分の生き方を振り返り、これからの自分に生かそうとする作品に、高学年としての力強さが表れていました。

また、作品を象徴させる題名の付け方がよく吟味されており、作品を方向付けるメッセージ性を感じさせられました。題名から冒頭、例示や説明等の中盤、そして結末に向けて一貫した論理構成があつてこそ、伝わる意図が明確になります。私たちは、この文章の組み立て方を、優れた作品から学んでいきたいものです。

### 〈全体に〉

これから気を付けてほしい点を二点申し上げます。一つは、応募規定に照らし合わせることを。二つ目は、作品を読み返して文章をよりよく磨くことです。

作品を仕上げることは、思考を鍛え思索を深めることでもあります。今後も、ジャンルや作者を大いに広げ、たくさんのお本と出合うことを期待しております。

審査員 近藤 澄江

